

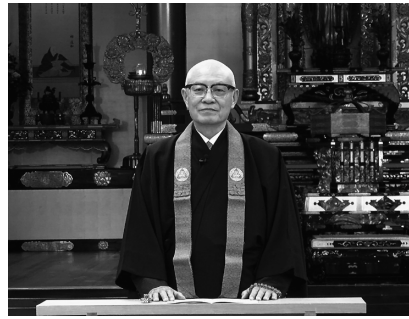
宗学院公開講座（二〇二〇年度）

現代若者の宗教心

本科講師 浅田 恵 真

はじめに

皆さん、こんにちは。宗学院本科講師の浅田恵真です。この宗学院公開講座は、例年、多くの一般の聴衆の方々に講堂にお招きして対面でお話させていただくのですが、今年はコロナ禍の中ですので、私が一人カメラに向かって講演し、ウェブにての発信を試みるようになりました。初めてのことでお互い戸惑うかと思いますがどうかご了承下さい。ところで宗学院の講座ですので学問的な内容をお話しようかと思つたのですが、一般の方々もお聞き下さるとのことですので、平易にといいますか、専門的内容では無く仏教に関心を抱いて戴ける様な、啓蒙的な話をさせていただきたいと思います。私は六年前に龍谷大学を定年退職しました。考えてみますと、四〇年に涉つて大学の教壇で仏教学を教えてきたこととなります。若い頃は良かったのですが、だんだんと年を重ねますと、学生と付き合うのは大変なことで、年齢差を思い知らされたことが度々ありました。定年時の私は六七歳です。大学一年生は一八歳です。歳の差は実に半世紀に及ぶのです。特に宗教に関してのお互いの思いに至っては、学生の



気持ちからず宇宙人と話しているような、何を言っても通じない感すら抱きました。しかし表面的には相容れないように思われても、じっくりと話あってみますと、宗教は年齢に関係ないんだということが分かってきたのです。一般に「現代の若い人は宗教離れしている」とよく言われます。しかし若い学生達にも素晴らしい宗教心があります。今日は私が在職中に実感した「若者の宗教心」について話したいと思います。

通常、大学は宗教学や仏教学というような学問を知識として教授し、学生自身の宗教心や仏教心を問うことはありません。しかし龍谷大学は宗門立の大学ですから知識だけでは無く宗教的涵養の教育も必要だと思ふのです。むしろここにこそ同じ仏教学を教授する国公立大学と違つて私立大学の差別化があると考えます。もつというならば龍谷大学で学んだ学生は仏教的生き方を身につけて卒業しなければ宗門立の大学を卒業した意味がありません。このような思いで私は自分の授業、特に演習（ゼミ）を進めてきました。しかし今の時代の学生に「あなたの仏教心は」などと端的に問いますと総スカンを受けて相手にされません。そこで身近な問題を議論する中から自らの歩む道としての仏教を考えてもらいたい、との思いで学生達に接してきたのです。

若い学生の考え方を問うとなりますと一番問題になるのが年齢差からくる感覚の相違です。定年前の私と学生との間に五〇年の差があると言いましたが、ここからくる違和感をまず払拭しなければなりません。これが大変です。このような感覚の違いを如実に示す短い手紙があります。

福井県の丸岡町が町おこしの一環として毎年テーマを変えながら「日本一短い手紙」を募集しているのはよく知られています。最初の頃でしたが「お母さんへ」というタイトルで「日本一短い手紙」を募集したところ、三万二〇〇〇通もの応募があったと聞きます。その中から十点ほど、一筆啓上賞と名付けた優秀賞が選ばれているのです。その一つに

お母さん、雪の降る夜に私を生んでくださってありがとう。もうすぐ雪ですね。

があります。私はこれを読んで心の底がジーンと響きました。母への思いに感激したのです。しかしこのような手紙に心を動かすのは私と年齢を同じくする方々でしょう。今の若者はこの程度では感激しませんね。

一筆啓上賞ではありませんが一九歳の男性の手紙です。

飯も食ってる、掃除もしてる。金もあるから心配するな。何か起きたら電話する。

たぶん故郷を離れて自活する学生の手紙じゃ無いかと思います。今の若者の心境をうまく表現していると思います。故郷にいるお母さんが心配して「きちっと朝ご飯食べているか」「下宿の部屋を掃除しているか」「小遣いはあるか」などと尋ねるのでしょうか。それに答えた手紙でしょうが、私たちの年齢からすると、滑稽さすら感じる内容です。これが、私たちの年齢の者と、若い人との違いだと感じます。こういう年齢差からくる意識の違いを認識しながら若い人に付き合っていかなければ彼らは心を開いてくれません。ですから最初はそのような教室の雰囲気作

りから始めました。

学生間での討論

さて、その雰囲気がある程度出来上がりますと今度は学生間で話し合うテーマが問題です。身近なテーマを設けて「仏教観を養う」目的を達成しなければなりません。

それを模索していた時の事です。私のゼミを卒え宗門立の中学校で宗教の先生をしている卒業生が突然研究室にやってきて「教えてもらいたいことがあります」というのです。その直前に神戸で中学生が大事件を起したことがあります。小学生を殺害して校門に首をさらすという、日本中を震撼させた「神戸A少年事件」です。あるいは他にも中学の生徒が先生をナイフで殺傷するという事件も起こり、中学生が続けざまに問題視された頃でした。そこで全国の中学校ではホームルームの時間にこれらの事件に対して問題意識を持たせるため、生徒間で話し合いをさせたそうです。そうすると彼の教室では毎回決まって「どうして人を殺してはいけないのですか？」と逆に質問することが度々あったというのです。しかし当の先生が生徒に十分納得できるような答えが出せなかったというのです。そこで私に「仏教ではどのように答えればいいのですか」と意見を求めてきたのでした。

そこで私は「人の命を取ることに理屈なんかいらぬ。人を殺していけないものはいけない、と頭ごなしにダメだと教えない」と言ったのです。そうしますとその学生は「先生のような教育の仕方は戦前の方法ですよ。今はそのような教育は通用しません」と言うのです。「今の中学校の教育は、生徒に自ら疑問を持たせて、それをみんなで討論することによって結論を出し、それに基づいて行動させる。だから納得させないといけないのです」と言うのです。私はその時に一瞬、彼の話を「なるほど」と思って迂闊にも同意してしまったのです。これが後にな

って大きな過ちを犯すことになるのですが、それは後ほど話すことにして、とにかく私は彼の話を聞いて「今の中学教育はこのような生徒に納得させることを優先するんだなあ」と思ったのです。しかし、今になってよく考えてみると、「命の問題」で、中学生のような若い人たちに納得させることが出来るでしょうか。歳を経て命の尊さを十分理解出来るまではたとえ頭ごなしであっても「ダメなものダメ」という教育もあって良いのではないかと思います。ただ彼の口調が大変巧みなこともあって私はとにかくその場は同調してしまったのです。

そこで彼は「先生ならばどのように生徒を納得させますか？」と再度聞いてきました。しかし現在の中学生を教えたことの無い私には正直言つて答えられません。「ちよつと考えさせてもらいたい」と言いました。「しかし、君は生徒から質問されて先生として知りませんとは言えなかっただろう。とりあえず何と答えたのかね？」と聞き返しますと、思わず出た言葉が「法律で禁止されているから」だということです。「予期しない質問をうけるとあわてしまつて……」ともいいましたが「もう少し宗教の先生らしい答えが出なかったんかなあ」といつて笑いました。

どうして人を殺してはいけないのか

それから私は、どのように説明すれば中学生たちが納得出来るかを色々と考えました。その最中です。『文芸春秋』（第七十八巻・第十四号）の「なぜ人を殺してはいけないのかと子供に聞かれたら」という特集号が目に入りました。卒業生の中学校だけでは無かったのです。日本の多くの小学生や中学生が同じような問いかけをしていることを知つて少し驚愕しました。この「特集号」では十人ほどの著名人が回答しています。しかし到底子供達が納得できないような難しい答になっています。その中に仏教界を代表して瀬戸内寂聴さんが答えておられました。「仏教の第一番の戒律は不殺生戒だから」というのです。仏教では「生き物を殺してはいけない」これが第一番の

戒律です。人を殺せばこの戒律に反するからという理由でした。もしこの回答ならば先ほどの卒業生と同じ答えになるでしょう。卒業生は法律で禁止されているからダメといったのです。仏教教団における戒律とは、いわば出家者間の法律に相当するものです。そこに禁止されているからダメといえ「どうしてそのような戒律があるの？」と子供達は聞くでしょう。そうすれば返って生徒を混乱させることになると思います。

それではどのように答えれば良いか随分迷いました。考えれば考えるほど、仏教にとって大切な問題だと感じたのです。そこでこの問題を学生間の討論テーマに設定すれば命の問題を通して仏教を自分のものとして考えてくれるのではないかと思い「君達の先輩が今このような質問を持ってきた。君達ならばどう答えるか」として「なぜ人を殺してはいけなさを自由に議論しなさい」を設定したのです。

案外議論は盛り上がりました。一時間半一回の授業では到底終りません。三回、四時間余りをかけて討論しました。これ程に論じあえばさすがに学生も意見が出なくなりました。ほぼ出尽くした感じがしたところで内容を整理しますと、わずか三点ほどに絞られたのです。第一は「私が殺されるといやだから人を殺してはいけない」です。これが一番多かったですね。第二は「殺したい相手であっても、必ずその人を愛している人がいるだろうから。要するに悲しむ人がいるから殺してはいけない」これが二番目に多かった意見です。第三にはやはり「法律で禁止されているから……」というのです。後日談ですが、これを法律に関わっている先生に話しまして笑われたことがあります。法律には「人を殺してはいけない」という条目が無いのだそうです。法律に素人な私には「本当ですか？」と思わず問い返しましたが「人を殺せばこのように処罰される」という項目があっても人を殺してはいけないという倫理規定はないのだそうです。「むしろその問題は宗教家の範疇ですよ」と返って私に矛先を向けられたことがあります。

ともあれ学生たちの意見に戻りましょう。如上の三つ以外、少数意見は様々に出ました。議論が加熱しますと極端な方向へ進んでいきます。たとえば緊急避難はどうかという意見がありました。船が沈む時、一〇人定員の救命ボートに一人が乗りこもうとした場合です。当然ボートは沈みますので最後の一人を殺しても良いというのです。あるいは戦争はどうかとの意見もありました。ですから「場合によっては人を殺すのもやむを得ない」という意見が大半でした。それに対してどんな時であっても殺人はダメだという少数意見もありました。ところが戦争で人を殺すことは是非かと議論沸騰していた時に、普段発言しない男子学生が手を上げたのです。「実は私のおじいさんが先の第二次世界大戦に参戦してフィリピンで現地人を殺してしまった」という話を始めました。もちろん自分が殺されるかもしれないせば詰まった状況だったそうですが、とにかく人間を殺したというのです。それによって勲章をもらったそうですが、戦後日本に帰って家族の人達に「大変申し訳ないことをした」としんみり語って懺悔・懺悔の毎日だったというのです。「そのおじいさんの姿が気の毒でなりませんでしたが、数年前に亡くなりました」このようなことをぼつぼつと語ったのです。そうすれば、戦争で人を殺すことはやむを得ないと言っていた学生達が全く反論出来ずに黙ってしまいました。観念的に「殺人」を議論していたのとは違い体験は人を説得するものだと感じたものでした。

自死は是非か

長時間議論しながらも意外だったのは学生達に「いのち」という視点でものを考える」ことが全く無かったことです。「人の命をとるから殺人はダメ」という発言が誰からもなされません。そこで私は次に異なった観点から議論をさせようとテーマを変えました。今度は「自死（自殺）はどうか」という問題を取り上げました。この話題

も議論が沸騰しました。学生の意見が全く二つに割れたのです。肯定派と否定派です。そこで私は教室の両側に向かい合って学生を座らせました。片や肯定派、反対側は否定派です。意見の定まらない学生は後ろに立ちなさいといい、討論を聞いている中で定まればその方に座るように言ったのです。すると自死を肯定する学生側が徐々に増えてきました。ほぼ三分の二程の学生が肯定したのです。

大学の授業ですので単に議論させるだけではなく、自分の意見を文章化させて整理させねばなりません。ですからレポートを義務付けました。これもテスト感覚のレポートでは学生達の本音が出ませんので、近年は気軽に書き込めるメールを採用しました。スマホで通学途中の電車の中からでも私の研究室のホームページにメールを送ってレポートに代えました。しかもそのホームページは掲示板形式になっていますので自分の意見を書き込めば他の学生も読むことが出来ます。休んでいる学生だつて見ることが可能ですし、外国へ留学している学生も見ることが出来ます。「今、ゼミでは何を議論しているのかな」って云う具合です。そのホームページの掲示板にあげられた自死を肯定する学生の意見を紹介しましょう。

①人は生きる権利が誰にでもあるように死ぬ権利も自由にあると思います。

②結局は個人の問題であつて、どう死ぬかということも、どう生きるかの延長線上にあつて他人に左右できる権利はないと思います

③自死した人の意思が尊重されないのも釈然としない。つまり自死を悪いことだと決め付けるのは間違っているというのが自分の意見です。

このように自死するのは「権利」だったり「自由意志」であつたりして、自死を「悪」と把握するのは誤りだとする意見が多いのです。あるいは

④自死を止めさせることは本当に良い事なのでしょうか。自死を止めればその人はまた生きることができずが、同時にその人が耐えつづけた苦しみをまた味あわせることになります。それはその人にとって本当に良い事なのでしょうか。

⑤自死することは自分の命を奪うことになりますが、自分の命なのだからどうしようと思ひます。人間いつかは死んでしまひます。それを自分の意志で早くなるかどうかだと思ひます。しかし實際僕もあまり自死してほしくありません。だからその人が自死を考える前に助けてあげたいと思ひます。

学生もこのように書きながら非常に迷つてゐる様子が見て取れます。自死を肯定したい、しかし一方ではそれで良いのだろうかという迷ひです。これ以外にも色々な意見がありました。肯定派が圧倒的に多かつたです。しかし「いのちの面」から考えると、自死も自分の命を取るのですから、殺人をして他人の命を取るのと同じ側面を持つてゐるのは言うまでもありません。ところが自死を「いのちを取る」行為と考える学生は誰一人としていませんでした。何度議論しても、「命が大切だから自死はダメ」という意見が出てきません。「命の大切さ」これを学生にどのように理解させればいいか迷ひました。

堕胎をどう考える

そこで次に、討論するテーマを教員の私が設定するのではなく学生に選定を委ねたのです。「いのち」に関する内容ならば何でも良いから、君たちの討論したいテーマを提示しなさい」と。そうすると何点か出されましたが、多くの学生が「人工妊娠中絶」を選んだのです。私は正直びっくりしました。授業に於いてこのような内容で討論させて良いだろうかときえ思ったほどです。しかし「みんなが一番知りたいテーマです」というのです。しかも「友達同士ではこの問題に関しては話しづらいですが、授業で取り上げれば、他人の意見を聞く事が出来るから」でした。「真剣に、しかも忌憚の無い意見を述べなさい」として「中絶」で討論が始まりました。私が考えていたよりも学生達は真剣で一生懸命でした。しかし議論を重ねていくと前回と同じように二つに割れました。中絶賛成派と反対派です。そこで同じように席を両方に分けて向かい合って討論させました。相手方をねじ伏せようとするためか、話しが進むと極論に入ります。レイプされた時はどうとか、母体に危険を感じた時は……などのようです。そこで「もし今君が、あるいは君の彼女が妊娠したならばどうか」と限定したのです。そうすると今まで客観的に見ていた学生が自分の問題として考え出したのです。中絶賛成派にはほとんどの女子学生が入りました。男性は反対派に多いのです。すると中絶をすべきでないという男性に対して女性が厳しく非難します。もつと真剣に考えるべきだということです。掲示板に掲げた次のような文章があります。

①多分自分の保身を一番に考えてしまうんじゃないかと思う。よくわからない。でもきつと産めない。男子諸君が産ませる、産ませるって言っているのを聞くとちゃんと考えているのかなあと疑問に思う。リアルに考え

てますか。

また、子供を虐待する気持ちが分かれると述べた女子学生もいました。

②私の立場に置き換えるとするなら中絶はするでしょうね。だって私子供が好きではないですし、子供を育てるというならば私自身が大人にならなければならぬでしょう。けれども、私はまだまだ子供であるし、子供でいたいと思うからです。ですから虐待をする親の気持ちがわかるんです。

討論している姿を見ていると決してふざけて書いているのではないのがよく分かります。

しかし驚きの連続でした。特に後者の子供の虐待問題です。世間で騒がれているそのままを彼女らは語りました。極端すぎる意見もありました。「お腹の中の赤ちゃんは人間じゃない」って言った学生までいました。この世に生まれてきて初めて人間であって母体の中にいるときは人間じゃない。だから中絶は殺人に当たらないというのが理由です。

これは自分の耳を疑うほどショッキングな意見でした。現代の若者の考え方はこんなにもひどいものか！と思った瞬間です。そしてこの時ほど年齢差から来る意思疎通の断絶を実感したことはありません。しかもそのように考える学生が一人や二人ではなかったのです。毎年一クラスに何人かがいたのです。

概して中絶賛成派の学生は次のメールに象徴されていると思います。

③今の自分の立場ではやっぱり産めないと思う。自分の親、相手の親も賛成はしてくれないと思うし、お互い学生ならそんな状況で立派に育て上げることなんてできないと思うから。

このような意見が多い中、一人だけ、次のように述べた女子学生がいました。

④前回の授業で先生が自分がその立場におかれたとして考えなさいとおっしゃるまで、とても客観的に考えていました。子供への虐待が騒がれているためそんなことなら中絶すべしと。しかし自分に置き換えてみると考えは全く逆になり、今自分が妊娠しているとわかったなら誰がなんといおうとも産みたい、いや産みます。両親をはじめ多くの人に迷惑がかかるのは十分承知していますが、私は子供を心から愛し育てる自信があります。若いから産めないというのは大きな理由にはならないと思います。考えの甘さや遊びから妊娠という結果を招いてしまうのは許せませんが、お互いが愛し合って授かった命は何ものにも代え難いです。

ここに来て初めて「命」でもって考えようとする意見が出てきたのです。「なぜ人を殺してはいけないのか」のテーマも、また「自殺は是か否か」も「いのち」の問題として考えなかったのですが「墮胎」を問題として、初めて一人の学生だけが「命は何ものにも代え難いです」と応えたのです。

人を殺せば地獄に堕ちる

私のゼミの運営方法とはにかく学生が思っていることを全部吐き出させる事から始めました。これ以上自分では

考えつかないと云う所に至って初めて「仏教は？」に耳を傾けてくれます。しかしそれまでは、仏教を基準として考えようとする者が誰一人としていないのです。仏教学は単なる知識であって、自分の判断基準にはなっていないのでしょうか。ただ「墮胎」の問題を扱って初めて「命の問題」として受け止めようとした学生が出てきたのです。そこで学生達に求める意見はこれまでだと思い、逆に私は次のように問いかけました。

君たちは今日まで仏教を学んできたにもかかわらず、全く仏教的見地からの議論が出なかったね。なぜなんだ。みんなが議論をしているこのゼミは仏教学のゼミなんだ。なぜ經典の上に説かれる内容で殺人や墮胎を考えられないのかね。人を殺せば殺人だよ。お母さんのお腹にいるから人間じゃ無いという学生がいたけど、そうじゃない、母胎の赤ちゃんも立派な人間だよ。その赤ちゃんの命を取るのが墮胎だから、これも殺人に他ならない。だとすれば、「いのち」を断つ罪を犯せば仏典にはどのように書いてあるかね。誰もが知っているだろう「地獄へ落ちる」と書いてあるじゃないか。人の命を取るという行為は地獄へ落ちるほどの悪業を犯すことになるんだよ。これについて誰もが言い出さないのはどうしてなんだ。

と少し地獄を強調して話したのです。そうすると普段よく発言する男子学生でしたが、私の発言を遮って立ち上がったのです。たぶん感極まったのでしょうか。

先生！、今どき地獄に落ちるなんて言ったら中学生が馬鹿にしますよ

と、鬼の首を取ったように言ったのです。他の学生も頷いていました。そこで僕は

中学生が馬鹿にするんじゃない。君自身が地獄を馬鹿にしているんだろう

と言いますとその学生は頭をかいて座りました。しかし、これは彼だけの思いではないようです。彼はむしろ多くの学生達の考えを代弁したのだと思います。そこで

經典には地獄があると説いてある。しかしそれを話せば現実ばなれしていると君たちという。それでは極樂はどうか。仏典には極樂があると説いてある。仏典を信ずるのか、それとも迷いの中にある自分の思いを信ずるのか。

と尋ねたのです。するとある学生は「極樂はあると思います。しかし地獄はないと思います」と言うのです。「自分にとって極樂はあつてほしい。しかし地獄はあつてほしくないから」と答えました。このように私達の都合によって仏典に説かれる内容を取捨選択して良いものでしょうか。地獄や極樂は自分の思いで有無を考えられる問題ではありません。仏教を学ぶのは仏典を学ぶことから始まります。仏典の内容を自分の憶測でもって善し悪しを判断してはいけません。私たちには窺い知れない「仏の悟りの世界」が説かれているのが仏典ですから、その内容を素直に受け止める事が仏教を学ぶ事になるのです。そこで私は学生達にもう一度仏教の原点に立ち返る必要性を説いたのです。

仏教とは何か

仏教はあまりにも広く、あまりにも奥深いですから、これを定義することは難しいです。しかし理解を容易くする為に三点で説明することが多いです。

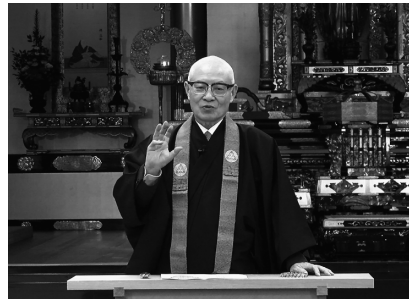
一、仏之教

二、仏即教

三、成仏教

最初の「仏之教」とは「ブッタの教え」です。これは「釈尊の教え」と言い換えられます。仏教とは何ですかと問えば、お釈迦さんの教えですと応える、これが第一の答えです。それでは次に「お釈迦様のどのような教えですか」という内容を問うのが第二です。「即」とは「すなわち」と読むのではなく「そのまま」です。「お釈迦様」そのまま「教え」とは「お釈迦様が悟られた内容を、そのまま説かれた教え」と言うことになります。これはお釈迦様の悟りの世界が説かれたのが仏教であるからといえます。これが第二の意味です。「そのような悟りの世界に私も至ることができる」「私も仏になることが出来る」というのが第三の「成仏教」です。この主語は「私」そのものです。「私が成仏する教え」こそが仏教であって、ここに仏教の究極的目的があります。これこそ生きた仏教の真価といえます。

ところで問題は二番目です。お釈迦様の悟られた内容を説いたのが「仏教」ということです。私達には悟りの体験がないものですから、悟りの世界の様相がわかりません。ところが仏典には悟りの世界の様子が書かれています。仏教を学ぶというのは、この世界の様相を知ることでもあるわけです。



今私達は迷いの世界に視点を置いています。いわば「煩惱を通した目」でもって世界を見ているわけです。ですから「欲」に執着する世界が展開します。ところが煩惱を絶って「悟りの世界」へ至る事ができたならば、「悟りの目」でもって世の中を見ることが出来ます。この悟りの目から眺めた様相を体験的に説いてあるのが「經典」です。私たちはこの經典を学ぶ事によって悟りの目のすばらしさを知ることが出来ます。これは私たちには窺い知ることが出来ない世界だからです。だから「不可思議の世界」とも言います。「思議」とは、心で思い、口で議するのですから、心で思ったり口で言ったりすることのできない境地が「不可思議の世界」と言うことになります。

このように考えますと迷いの世界から世の中を見る見方と、覚りの世界から世の中を見る見方の両面があることが分かります。そしてお釈迦様は煩惱という色眼鏡をかけて見る迷いの世界は「妄想顛倒の虚仮の世界」と示しておられます。一般に「坊主憎けりや袈裟まで憎い」とか、「あばたもえくぼ」といえるのはそこを指します。袈裟など憎いはずがありませんが、坊主を憎いと感じた人にはその人が着ている袈裟まで憎く見えるのです。アバタはアバタであってエクボではありません。しかし可愛い思いで見ればエクボに見えるのです。これを煩惱という色眼鏡を掛けて見る世界と言われる所以です。

これに対して煩惱をなくして仏の目で以て世の中を見ればどうでしょう。迷いの目からは見ることでできない世界が開けるのです。

「極楽があるよ、地獄があるよ、阿弥陀様がおられるよ」と説いておられるのはこの目でもって見た世界観です。

これらを教えて戴くのが仏教を学ぶと言うことでしょう。その悟りの目で見た内容を、迷いの凡夫の私たちがどうして疑うことが出来るでしょうか。經典に説かれる内容を疑うのであれば、仏教を学ぶ基本姿勢が誤っていることがこれにて理解出来ると思います。

世間虚仮、唯仏是真

「迷いの世界」と「悟りの世界」をもう少し掘り下げてみましょう。この二つの世界が明らかに存在しているように話していますが、それは迷いの凡夫から見た場合です。いわゆる「迷界」にいるからこそ「悟界」という世界を「対」に考えます。しかし「悟りの世界」から見ればそこには「迷いの世界」などはありません。なぜならば転迷開悟といわれるように「迷いを転ずれば覚りが開かれる」からです。「迷い」がそのまま「悟り」なのです。そうしますと「覚りの世界」こそが真実であって、「迷いの世界」とは「虚仮の世界」だと言うことがわかります。ですから「仏典は鏡」だと思っています。真実の世界に照らされて、初めて迷いの世界の状況に納得出来るのです。この世は「諸行無常の世界」＝「虚仮の世界」であることが理解できるには、真実の世界の状況と照らし合わせればそれが解るのです。ですから覚りの世界が「鏡」なのです。ところが自分の経験内のみが真実だと疑わない人にとって、迷いの世界の虚仮性は理解出来ません。迷界を真実の世界だと誤認します。ここを「顛倒^{てんどう}」と呼びます。ひっくりかえって物を見ると言う意味です。全く逆の見方が正しい見方だと勘違いするのです。聖徳太子は、「世間（迷いの世界）は虚仮であり、出世間（仏の世界）こそが真実である」という意味の「世間虚仮 唯仏是真」と申されました。俗世間（迷いの世界）は虚しい仮の世界であり、ただ仏（の世界）のみ真実であるという意味です。同じように親鸞聖人は、お念仏の世界こそ真実の世界と味わわれて

よろづのこと、みなもつて、そらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますといわれたことは有名です。「よろづのこと皆もつてそらごとたわごとまことあることなきに」とは「世間虚仮」を言つた言葉でしょう。「ただ、念仏のみぞまことにておわします」とは「唯仏是真」です。念仏の世界が真実の世界だとわかつた時、はじめて私の今いる俗世間が「虚しい仮の」「諸行無常の」世界だということに納得できるのです。

ところで私たちは普段自分の人生を自分で「生きている」と思っています。「生かされている」とは気づきません。ここに一般的見方と宗教的見方の違いがあると思うのです。「生きている」と思うことは俗世間的な視点で考えた場合です。これが「迷いの世界」の見方です。ところが「生かされている」と見ることは出世間的な仏の世界に照らされて物を見る事が出来た場合です。普段、自分の人生は自分で生きているとしか考えませんが、お念仏の世界があるよ、仏さまの世界が真実の世界なんだよとわかつた時に、今まで自分が生きていると思つていたが、実は自分で生きているんじゃない、仏様の手のひらの中で生かさせて頂いているんだと解るのです。ですから迷いの世界に視点を置いて世の中を見るか、悟りの世界に照らされた視点で世の中を見るかによつて全く逆な見方が出来るのです。「生きているんじゃない生かされているんだ」と思えることは、視点の大きな転回です、ここに宗教的見方があります。覺りの世界に照らされて世の中を見ること、それを宗教的見方と言うのです。

この宗教的見方に身を置くように指導することが宗教的涵養の教育では無いかと私は思います。しかし最初、学生にこれを端的に説くと反発しますので「俗世間の目で世の中を見るのではなく、仏教的見方でものごとを考えるようにしなくてはいけないよ」と教えるに止めざるを得ないのです。きっとそのうちに解つてくれるだろうとのん

きに考えていました。要するにこの問題にそれほど緊急性を感じてはいませんでした。ところが私の話を聞いていた受講生の中に、自死を真剣に考えていた者がいたのです。私には全く気づきませんでした。

ゼミ生の自死

その学生は、私が一回生時から担当していたゼミ生で、非常に優秀でした。四回生の時、卒業単位をほぼ取り終えたのですがゼミの議論に参加したいと言うだけで五回生に残りました。ですから毎回ゼミに出席し議論にも加わっており私には変わった様子などまったく感じられませんでした。一月の初旬でしたがゼミの授業を一日休んだのです。どうしたかなと思いつつもさほど気にしませんでした。その次の週のことです。大学の教務課から突然電話で「先生担当のゼミ生が亡くなりました」との報告を受けました。私には青天の霹靂でした。思わず「交通事故ですか」と尋ねたのですがそうではありませんでした。すぐさま大学へ駆けつけてゼミ生全員を集めたところ知らなかったのは私一人でした。ゼミ生一人一人すでに警察から尋問が入っていたようです。他言しないようにと要請されたので先生には言わなかったと言います。その中で、最後の電話を受けた後輩の女子学生がいました。彼女に電話が掛かったとき、名前を名乗っただけで何も話さなかったと言います。不審に思つて「心配事があるんだつたら聞きますよ」と応答したそうですが彼は話さずに、しかも電話を切ろうとしなかったそうです。三分ほど無言の状態が続いて彼の方から電話を切ったということです。携帯電話には通信記録が残ります。その記録と死亡時間とが一致したものですからそれが根拠になつて自死と認められたと聞きました。その時実家にも同じような電話をかけていたようです。お母さんが不審に思つて下宿へ飛んできたのですが亡くなった後だったと言います。お母さんは「時が止まったようでした」と報告下さいました。

先立つ人は善知識

私は大変に悔みました。「これだけみんなと一緒に議論を重ねてきたじゃないか。自死の討論にもう一年加わりたいといって卒業を延期してまで話し合ったじゃないか。それなのにどうして……」僕は本当に悩みました。このような事が無いために議論してきたのです。それをなぜ分かってもらえなかったのかと……。そしてまた申し訳ないことをしたと自責の念に駆られました。私は討論する最初に「絶対に自死をするんじゃない。命の大切さもわからずに自らの命を取るんじゃない。命の大切さがわかるまで自死をしてはいけない。とにかく自死はダメ」と頭ごなしに言えなかったのかとの後悔の念で一杯になりました。ただそれを言えなかったのは、当初に話した卒業生との対話だったのです。彼は「ダメなものはダメと頭ごなしに教育する仕方は戦前の教育方法で、今日そのような方法を用いれば生徒は反発します」と言ったその言葉が私の脳裏に残っていたからでした。

どんなに悔やんでも悔やみきれません。数日後、彼の自坊でお葬式が行われました。ゼミの学生を連れてお葬式に参列しました。そうすると式が終わった直後、最後の別れの時です。お棺の横にお母さんが寄り添って、放心しきった顔で彼の頬を撫でておられたのです。あまりの切なさに私たちは顔を向ける事が出来ないほどでした。女子学生は全員背けて泣いていました。しかし僕は学生たちに言ったのです。「この姿をよく見せてもらいなさい」。そして「この姿がね、彼の最後の私たちへの送りものだよ」って。

葬儀は一月の中旬ごろでした。同行したゼミ生は明るる年の一月一〇日に卒業論文を提出しなくてはなりません。彼らはいくら時間があっても足りないほど大変な時期でしたが、それでも彼のことを偲んで皆で「追憶集」を出そうと提案してくれたのです。そこで私はその追憶集に「彼からの贈り物」というタイトルを付けました。普通、

追憶集といえは「どうしてあなたは亡くなったのですか」などの文面で終わってしまいがちですが、それではなく、彼が自死した意味を考えて欲しいとの願いからこのタイトルを付けたのです。彼を偲ぶことは同時に彼が私たちに教えたものとは何かを考える事でもあると思ったからです。その中に実にすばらしい追憶文がありました。

あなたのお母様がお別れのお花をお棺に入れている時にずっとあなたの頬を撫でていらつしやいました。とてもやさしく悲しいお顔をなさっていました。今になって私のお母さんが私のために泣いてくれたことを思い出しました。

中略

先輩、お母さんていいですね。私はあなたのお母様の泣き顔に教えられました。お母さんを悲しませることはしてはいけなと。どんなに悪いことをしても怒らせても、一番最後まで自分を、決して見捨てることのないのはお母さんだけじゃないかな。恋人でもなく友達でもなく。こんなことを浅田先生に言ったら君は今まで何を勉強してきたのかね、阿弥陀さんだと前から言ってるやろうと怒られそうですが、先輩とあなたのお母様に会えることがなかったら、私はいつも自分のそばにある愛に気づくことはなかったと思います。今までの私は、仏の慈悲はもとより、母の愛の重みにさえ全く気づくことがありませんでした。仏の慈悲も母の愛も遠いと思っていました。本当は一番近いはずなのに。

あるいは他の学生ですが、

一番辛かったのは彼のお母さんが亡骸を見送る姿でした。いとおしそうに彼の側を離れなかったお母さん。私はふと自分の母のことを思い出していました。私の母もこんなふうになるのかな、と自分の母と重ねたりしていました。その姿は今でも目に焼き付いて離れません。お葬式の後、家に着いてからの方がもつと悲しくなりました。母の顔を見たら思いが込み上げてきて、ワンワン泣いてしまいました。式の様子を話して、彼のお母さんの姿を話しているところで母が泣き出しました。しばらく二人が泣いた後ご飯を食べました。その日の夕飯は特別な感じがしました。お葬式で見た彼はもう息をしていない。生きていない。でも私は生きている。そのことはとても不思議に感じました。

それからしばらく、ご飯を食べたり、お布団で眠ったりすることなど日常では当たり前にしていることが生きている実感として幸せに感じられました。彼が亡くなったことによって生きているという幸せを改めて感じます。なんて不謹慎なことでしょう。しかし、人の命が尊く生きているというだけで、幸せだということが身にしみて感じられました。

と書いてくれたのです。すばらしい彼からの贈り物として受け取ってくれました。彼は自らの死をもって母の愛を教えてくれたのです。そして仏の慈悲や本当の幸せを教えてくれました。何よりも「与えられた命の尊さ」を示してくれたのです。この追憶文を書いた学生達は普段と同じ生活の中から、普段では気づかない事に気づいてくれました。これは彼の死という真実を凝視したところから出てきた感慨だと思います。

学生達が「世間虚仮、唯仏是真」を納得できるような出来事を、私は在職中にもう一度経験しています。これほど悲しい話ですが、もう一例、話しましょう。

生かされて生きる

私は以前、短期大学部に所属をしておりました。ある年の一〇月一〇日のことです。当時この日は体育の日でした。三重県の国道で大型トラックと短大の学生達三人が乗る普通乗用車とが正面衝突したのです。お互いのフロントがぶつかり合うと言う生やさしい事故ではありません。大型トラックの床の下へ小型自家用車がもぐり込んで窓から上がふっ飛んだ写真が新聞に掲載されました。乗っていた三人は即死でした。現地に飛んだ教授からは余りにも無慚な姿だったという報告が入りました。最初は名前すらわからなかったそうですが、車のナンバーから所有者へ連絡が入って判明したと聞きました。話せば長いのですが事故の様子はこうです。他大学の学生を含めて四人友達がいそうです。その中の一人が車を持っていたものですから休日を利用して三重県へドライブに行く事になったそうです。当日の朝、車の所有者の下宿へ他の三人が集まったのですが、当の所有者は風邪を引いて寝込んでいたといひます。そこで「車を貸してあげるから三人で予定通りドライブに行つてほしい」と言つたそうです。そして事故に遇つたのです。本当に惨めな事故でしたし、大学としても大変でした。二人の龍大生が亡くなったのです。ところで短大では在学中の思い出を綴つた「飛翔」という卒業論集を出しています。私はこの年、編集の責任者だったものですから、ページを割いて亡くなった友達の出を書いてほしいと頼んだのです。そうすれば「事故で亡くなった君にささげる言葉」としてわずか十数人でしたが追憶文を寄せてくれたのです。その中に感激するような文章がありました。普通には「送る言葉」は

①いまだに信じられません。彼の姿がもう見れないなんて。あの笑顔が忘れられません。悲しいです。

このようなのが一般的でしょうね。

ところが今まで机を並べて一緒に勉強して来た友達が、一夜にして居なくなった事を考えると、そのように単純な送る言葉では済まされないと思ったでしょう。

②一緒に勉強してきたのに、もうすぐ一緒に卒業するのに、と考えると人一人の命の尊さというのを思わされました。

と書いてくれた友人がおりました。ここに「命の尊さ」とあります。このクラスで私は仏教学という授業を担当していました。その教室の雰囲気が彼の死を境として全く変わったのに驚いたことを覚えています。学生達が友人の死を目の当たりにして人間のはかなさを知った為でしょうか。とにかく仏教を学ぶのに真剣さが出てきたように思いました。他にも

③まことに残念に思うばかりです。改めて私はこの世の無常さを認識し、生かされている命に感謝します。

「生かされている命」とあります。視点が迷いの世界から「仏の世界」に置き換えられていることが分かります。これがわずか二十才の学生の言葉だろうかと思える文章もあります。

④あまりにも早く死に急ぎましたね。生かされて生きるという気持ちを大切に彼の分まで一生懸命がんばりま

す。

⑤生かされて生きるという気持ちを大切に。散る桜、身をもって示す仏かな。私に示してくれた最初で最後のたった一枚の写真から

とも書いてくれています。たぶん彼の写真を見ながらこれを書いたのでしょう。ここにも共に「生かされて生きる」とあります。一人だけがこれに気づいた事でないことが分かります。

特に私は「散る桜、身をもって示す仏かな」の文章に感激しました。良寛さんの歌に「散る桜、残る桜も散る桜」があります。亡くなっていった人が散る桜で、残る桜とは生き残った私たちです。その私たちも、いずれ死んでいかなければならない、というのが良寛さんの歌の意味でしょう。同じように死んでいった友達を「散る桜」と呼び、その友が事故で急に死んだ意味をよく考えてみると「どんなに若く元気だったとしても必ず死なねばならない存在だよ」ということを私に身をもって教えてくれた友人は、まさに仏様の生まれ変わりであった……という事ではないでしょうか。良寛さんよりもっと深い意味を持っていると思われませんか？　すごい文章を書いてくれたと感激しました。

送る言葉のいずれを読んでも実にすばらしい内容です。皆に良いところを見せようなどと思って書いていません。少しも飾っていません。それがすごいと思うのです。短大の二回生ですから二十歳です。この学生が一回生の時には「お浄土って本当にあるんですか」と質問していた学生たちです。他の学生と少しも違わない普通の学生だった

のです。その学生が

⑥少しがに股でパーカーを着ている姿が印象的でした。お浄土でいつか会いましょう。

一年でこれほど変わるのか不思議なくらいです。しかし彼の事故死がなかったならば恐らく「お浄土の存在」は教科書の中だけで終わったかも知れません。たぶんこのような見方はできなかったと思います。「目に見えないお浄土の存在を疑わない」ようにしたのは「諸行無常の実感」では無かったかと思います。そしてそのような思いを懷いたのは一人だけではなかったのです。

⑦彼のことをいつも思い出しています。ずっと忘れないと思います。お浄土でまた会おうね。

⑧明日ありと思う心のあだ桜。お浄土っていいところなんだそうです。

友達の話事故死という体験を境にして彼らの見方が一八〇度変わったのです。

ところで、この「生かされている」という視点ですが、如上のような無常の体験をしていない学生に「今あなたは生かされていると思いますか」と聞きますとほとんどの学生は「思います」とは応えます。しかし「誰に（何に）生かされていると思いますか」と再度聞きますと「太陽によって、あるいは空気によって、あるいは両親によって生かされていると思います」というのです。「仏様に生かされていると思いますか」と問い直しますと怪訝

な顔をします。「仏様って何？」って言う感じです。しかし如上の学生達は明らかに「仏様」を意識しているのが見て取れます。「目に見えない仏様に生かされている」これはまさに仏教の世界に視点が移った言葉だと思います。わずか二年間ですが仏教を学んだ成果がここに現れたと思って、たのもしく読ませていただきました。

私の出世本懐は？

このように考えたときに、仏教学の立場から、命の大切さをいかに教えるかということは難しいと思います。仏教が解った時にやっと命の大切さに気づくと思えるからです。そこで私は近頃「自分自身の出世本懐を問いなさい」と話すことにしています。

皆さん「出世本懐」という言葉はよくご承知ですね。一般に「お釈迦様がこの世に出てこられた（出世）真の目的（本懐）は何か」を問うとき「釈尊の出世本懐の経典は何ですか？」などと使われます。お釈迦様はこの世に出てこられ、様々な経典をお説き下さいましたが、本当に説きたかった本懐の経典は何かを問うときに使用します。ところが、出世本懐の主語を「釈尊」では無く「私」に変えるのです。私の「出世本懐は何か」を問うのです。禅宗ではこの方面からの問い方をよくしますが、この問い方こそ宗教的問い方であって、非常に大切な見方だと思います。私は生まれ難い人間に生まれたのですから、その人間に生まれた真の目的を真剣に問い求めねばなりません。この追求こそが仏道そのものです。ですから「命の大切さを」を、自らの「出世本懐を求める」側面から追求しなければなりません。

既に述べましたように仏教の目的は、自らの成仏にあります。人間に生まれて、仏法を聴聞することによって自ら仏と成る道を歩ませて戴く、これが仏教の究極です。それはとりもなおさず「私の出世本懐の追求」でもあるの

です。私がこの世に出生した真の目的は生死輪廻からの解脱です。自らの成仏です。仏教が目的としていることが私の人生の真の目的なのです。この目的に思いを致したとき、その途中で容易く命を断つ事が出来るでしょうか。命を粗末にすることは今生において、その解脱の道を自ら断ち切ることになります。成仏道が中断されます。受け難い人身を受け、聞き難い仏法を聞き、成仏への道を共に歩ませていただくからこそ、自らの命も他人の命も共に大切なのです。このことは仏道を歩めば、その中において自然とわかつてくることです。

仏教学に限定して言えば、近年の大学の授業は知識の切り売りの感が拭えません。教えている仏教、学んでいる仏教に自らの人生を問うことをしなくなりました。単に「仏教ではこのように考える」という一思想として教授するだけです。これを知識の切り売りとは私は呼んでいます。これでは命の大切さは理解できません。仏教本来が目的としている自らの出世本懐を求める仏教でなければなりません。

学生達に「堕胎の問題」を議論させたときに感じました。あるとき学生に尋ねました。「君たちの友達、あるいはそのまた友達でもいい、実際に中絶をしたという話を聞いた事のある人、手を挙げてごらん」と問うたのです。すると、毎年、半分以上の学生が手を挙げました。ある年に至っては全員手を挙げた事がありました。私はゾッとしました。大学一年生は一八歳です。

それどころかもっと切羽詰まったことがありました。「中絶をどう考えるか」を問うた一回生のレポートの中に堂々と「私は今、妊娠しています」という書き込みがあったのです。しかも「中絶しようかどうか迷っています」というのです。事実かどうか本人にすぐ連絡を取り事情を聞き対処しましたが、「いのちの問題」はここまで見過ごすことの出来ない大問題になっているのです。しかし今日の大学はこの問題を正面から取り上げる教育を施していません。現代大学教育の盲点とすら感じます。この盲点の教育に仏教を自ら歩む立場でもっての教育がなされね

ばならないとつくづく思いました。

京都拘置所でゼミ授業

ここまでの話は、『生かされて生きる』として人を殺してはいけないのですか』（探究社刊）という私の著書に書いていますので関心のある方は読んでいただければと思います。ところでこの本を読まれたある方から私へ連絡がありました。京都拘置所の法務教官からでした。このような仰々しい肩書きの方から電話を戴くのは初めてでしたので一瞬緊張しました。用件を聞いてみますと奈良県に少年刑務所がありました、そこが閉鎖されることになり収容されていた受刑者が全国の拘置所へ分配されたそうです。本当は刑務所へ配分されるのでしょうが少年犯ということで拘置所へ移管されたようです。京都は一〇年の刑期を受けた三名の殺人犯を受け入れたということです。その受刑者たちは既に八年の刑期を終え残り二年間を京都で過ごすようになったのですが、この間には特別なプログラムが用意されているといえます。それは出所後に社会に適応出来る教育を施す為のものだそうです。そのプログラムに私の講義を是非入れたいという依頼だったのです。

京都拘置所の教育官がたまたま私の『生かされて生きる』として人を殺してはいけないのですか』を見たところで、この内容を受刑者に教授してほしいというのです。正直私はうろたえました。考えれば考えるほど大学の授業は机の上だけで議論していた問題だったと思ったからです。実際に人を殺した殺人犯にまさかこの問題を投げかけるとは想像もせずに頭の中だけで話し合っていたことを改めて思い知らされました。しかしそうとは言っておられません。意を決して拘置所へ出向きました。初めて入る場所ですから、どんな恐ろしいところで、どんな人物が出てくるのだろうかかと戦々恐々でした。入る度に鍵の掛かる扉を何重にも越えやっと受刑者と面談しました。面接

してまた驚きでした。受刑者三人は私には大変な好青年に見えたからです。動作はキビキビとし、返答もハッキリした声です。感想を書かせますと誤字や脱字も無くキッチリとした字体で書きます。同年代の大学生と比べますと余りにも大差があります。「この方達は本当に殺人犯ですか？」私の第一印象でした。

殺人犯に講義

私に与えられた講義は週一時間で三回です。大学と同じように討論形式で進めて下さいとのことでしたので、時間内に三人に考えさせたい内容を熟慮しました。その参考になったのが、授業に先立って採って戴いたアンケートでした。その中に「あなたはどのようにして人を殺してはいけないと思いますか？」という設問があったのです。まさにこれから議論する主題そのものです。そこにAという受刑者が「ダメなものはダメだからです」と書いてありました。



た。たぶん八年間の入所中に教え込まれたものですが、私が最初に卒業生に言ったのと同じ内容であっただけに少々の驚きでした。ですから私はここを受けてテーマを設けたのです。「人を殺すという何がダメなんですか？」と三人に問いかけたのです。三人ともキョトンとしています。詳しく説明しますと「実際に人を殺すこと（これを身業しんごうといいます）がダメなのですか。それとも『おまえを殺したい』と口に出すこと（これを口業くごうと呼びます）がダメなんですか。あるいは、実際に殺さずしかも口にも出さないけれども、心の中で殺したいと思うこと（これを意業いごうといいます）がダメなんですか？ダメなものはダメというダメとはどれですか」というテーマで彼らの意見を求めたのです。すると三人共に「それは実際に人を殺す

ことです」と答えました。「ならば他の二つはどうですか？」と聞きますと、これも同じく三人が共通して「口には出さない方が良いでしょうがダメとは言えません。また心で思うことは自由です」と答えたのです。そこで「私がここに来たのはあなた方が自らの罪に対して心の底から改心するように自覚を促すことが目的です。心の中では人を殺しても良い、それは自由だと思っておれば到底改心しているとは思えません。ダメなものはダメというダメは実際に人を殺すことは当然ですが、口に出すこともダメ、心の中で考えることもダメなんです。これを身業・口業・意業とも言いますが、業とは「おこない」とか「行為」という意味です。口で言うことも「口業」と呼んで行為と見るのです。また心で考えることも行為なのです。これが「意業」です。しかもこれら「三業」^{さんごう}の中、仏教では特に「意業」を重要視します。身業も口業も意業からの働きかけなのです、という話をしたのです。私が驚くほど熱心に聞いてくれました。すると第一回の授業後A君は次のような感想文を書いてくれました。

身業、口業、意業がともに行為であり、行動に移すことと同等以上に心で思うことも同じ行為という考え方は、今までに感じたことのない感性であります。これを聞いて最初に思ったのは、そういう考え方、捉え方があるのかということでした。なぜこの考え方がスツと入ってきたのかといえば、今の自分自身に必要な不可欠なものと感じたからです。感情の高ぶりで行動に移してしまう私には、この仏教の考えは、自分を変える現時点で大切な視点になるのではないかと思います。

初めて聞く仏教の話に関心を示してくれたのです。しかも「自分を変える大切な視点」と把握してくれました。身業は目に見えます。口業は声に聞こえます。しかし意業は見えませんかし聞こえません。だから何を思おうとも自由

だというのが一般の考え方でしょう。しかし仏教はそうではありません。心で思うからこそ行動するのです。人を殺したいと思ったから殺人という罪を犯すのです。この心を改めなければなりません。ここに刑に服する意味があると いえます。仏教では心が全てとまで言い切ります。「唯識ゆいしき」という要語があります。「識」とは「こころ」です。この世の総てが「ただ識のみ」という要語です。世の中の現象すら自らの心の変現と見るのです。それを表した俗歌に

笑つてみれば笑つて返る、怒つてみれば怒つてかえす　ほんにこの世は鏡のかげよ、泣くも笑うも我しだい
があります。この歌を紹介しますとB君は

意の部分、心の部分、心は感情に近い、感じる部分だと思ひます。思ひやりもそこらきます。もつと広く言
えば、知識や意思などの働きの元となるものであつて、嘘、偽りのない本当の気持ちであります。要は、思
前の感情であつたり、知識であつたり、気持ちが生まれてくるところがまとめて心です。意業です。人の基盤
みたいなものだと思います。

心は目に見えないから度外視しても良いと考へていた受刑者たちが心の大切さを認識してくれたのです。しかもそ
れを基盤と考へたことは何よりもうれしかったです。そこで残り少ない時間を利用して「惣」という漢字を紹介し
ました。「惣」は当用漢字にはありません。今日では同じ意味の「総」を当てます。しかし「惣」とは「物」と

「心」から出来ています。物と心で総てなのです。物だけが総てだと判断しないでほしい、その基本には心があるのです。目に見えないからと言って心を忘れるとダメです。心（立心偏）を亡くすと書いて「忙」と言う漢字になります。忙しい、忙しいと言って走り回することは心を亡くしているのですよ。これから決して心を亡くさず、落ち着いて行動して下さいと締めくくりました。するとC君は

全てのものは心が作り出したもの。心のありようによって言葉や行動に現れるので、心は一番大切だと思います。いつでも心穏やかでありたいと思います。自分の心に嘘をつかない生き方でありたいです。死後、身体はなくなっても心はなくならないというのが印象的でした。お墓に参るのは、その人の心に会いに行っているのですね。そう考えるようになって、頭の中がガラッと変わりました。自分の生きざまというか、生き方をすごく考えるようになりました。大事なのは心のあり方。浅田先生、ありがとうございました。

この文章を読んで目頭が熱くなりました。

わずか三回の講義でしたが感激でした。教育を終わつての感想はまず最初に非常に積極的に学んでくれたことでした。当初、彼らは目に見える面だけを見て心を問題視していなかったのです。これは彼らだけではありません。若い人の特色のような感じがします。ところが、心の問題に気づかせることができたということは大変な成果だったと自負しています。彼らに学ぼうとする積極性が無かったならば心に気づくことすら無かったでしょう。心に気づいたことは、宗教に触れるチャンスを与えたことになると思います。当然ながら三時間では仏道における命の大切さを気づかせるまでは出来ませんでした。それは残念でしたが、これにて彼らには仏教を理解できる素地は出来

たと思います。

そして第二には素直に話を聞いてくれたことです。「水が染み通るように心に入っていった」と語ってくれましたが、それは彼らの心が素直だったからでしょう。

これらのことを考えますと私には再度「どうしてこのような人が殺人を……」と思えます。そこで私には『歎異抄』の言葉が思い浮かべられました

さるべき業縁ごうえんのもよおさばいかなるふるまいもすべし。

です。親鸞聖人が言われます「業縁」を考えますと、ふと「触れる縁によっては私と彼らの立場が逆転していたかも知れない」と思ったものです。僕がああ拘置所に入って、彼らが私の教育に来てくれる……そのような立場を想像したのです。業縁の不思議さと有り難さを実感したものでした。

このように考えたとき私の心の中には彼らを凶悪な殺人犯と見る意識は消えておりました。最初は大変構えて行ったのですが、本当に普通の人でした。しかも素直な好青年との印象を持つて終始過ごすことが出来たのです。最後に言い足りなかった点として、少しでも仏教に触れてもらいたい思いから、次のように伝えました。

この獄中で君たちに考えてもらいたいことがある。人間に生まれてきた真の目的は何か。これを考えてほしい。人を殺すために人に生まれてきたわけじゃないだろう。だから、人間に生まれてきた本当の目的をしっかりと考えて出所してください

そう言って拘置所を去りました。

ま と め

殺人犯に命の尊さを教えるという得がたいチャンスを与えていただいたことを有り難く思います。そして龍谷大学の学生のことから、拘置所の受刑者のことから、考えられる結論は、命の大切さを知ることが仏教を歩む中に見出すことが出来るということでした。

つまるところ、人生を歩む中において諸行無常の世の中を実感し、仏教に触れて自分がこの世に生まれてきた真の目的（自らの出世本懐）を追求すれば、自ずと「いのちは何と大切なんだろう」と実感できることだと思えます。「このいのちがなければ生まれてきた目的を達成することが出来ない」からです。

だから、あえて命が大切だという面のみを強調するのではなく、仏教の大切さを教える中に、「命はかけがえが無い」ということを自然と理解してくれるものと思えます。

ほぼ一時間半、話させていただきました。あまり学問的ではなかったですが、皆さんともこれを機縁として「共に仏道を歩ませて戴きたい」と願っています。有り難うございました。

